

高橋秀

じつは医療器具が題材なのだが、それでも冒頭の「人切りて」は、読者をえつ、と思わせる。

医療器具をあつかう現場を、細部までいいねいに表現した一首。近年、歌壇全体の傾向として、職場や働く現場や歌が少なくなっているが、この作者、継続的に独自の作品世界を構築しつつある。期待したい。

日本語は違ふ気がしてアリゾナの鹿の死骸に手を合はせをり 佐佐木頼綱

鹿の死骸の前に、日本仏教や日本神道の礼節とはちがう流儀で、礼拝したの意味だろう。日本とはまったく違うアリゾナの風土や空気を、意外な角度で表現している。異色の外国詠として注目した。

今年の「寺山修司賞」を受賞した島田幸典『駅程』をはじめとして、かつてとはちがう新しい外国旅行詠が出てきているように思う。この一首なども、従来外国詠とはずいぶん違っている。

人形を探しにここへまた来たり十年ぶりの三度目のパリ 野原重莉子

これも従来型の旅行詠とはちがう海外詠である。人とか風景とかではなく、目的はただ人形に会うためだけだという。季節もない、気象もない、もちろん風土、時代等への興味もまったくない。一首の核は「また」だろう。ふたたび来た自分への好奇心か。

花の咲く季節に死ぬは願望かその気で読めりお悔み

楠を

楠本邦利

特定の誰かの死ではない。個人の死ではなく死という現象そのものをとり出して、自分の死を重ね合わせている。自分も、花の季節に死にたいと本当に思っているのかどうか。「その気で読めり」が深読みを誘う。

こわされしホテルの先の青空にバブルの雲がひとつつ浮かべり 伊井かずひろ

何階建てか何十階建てかのホテルがなくなつて、これまで見えなかつた空が見えるようになった。今日から見たたせるようになった何も無い青空に、記憶のように「バブルの雲」の幻想を見る、の意味だろう。風刺を読んていいのだろうと思う。

回復を祈ると記し投函はせずに毎日持ち歩きおくり 宇都宮とよ

投函し忘れたのではない。投函しないのは、理由があつてのこと。回復の見通しが立たないとか、幾つか理由が想像されるが、その点は表現せずに、余白のままにした思いを読み取らせる。

クレーンの五本真つ直ぐそびえ立つ釜石港の明るき空に 鈴木勉

東日本大震災後五年の釜石をたずねての一連。その中で、明るくあくまでもシンプルに復興をクローズアップしたこの作に注目した。映像もリズム、徹底的に明快であることよって、独特の世界を獲得している。